

「教室の外 - 2008 年」

学校教育（教育学）・山本久雄

はじめに

昨年に引き続き、今年も「教育システム論」を取り上げる。できるだけ多くの科目を対象とすべく毎年取り上げる科目を変えるように、という基本方針に抗って、敢えて同じ科目を取り上げる理由は、この科目が報告者のこだわりの科目であり、この科目で得られた知見が他の科目に援用可能で、従って、そのことが報告者の教授力量の向上を図る上でより有益と思われるからである。

ただ、現実はその甘くはない。昨年度の本報告の総括として挙げた課題は本年度もまた克服されずに残ってしまった。

1 授業の概要

本授業は「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項」（免許法）を扱う教職必修科目であり、その目的は「すぐれた教員として必須の教養をつけるため、教育に関する社会的、制度的又は経営的事項についての基礎理論を理解し、改革の動向を把握する。」である（シラバス）。授業の内容は、教育制度論として既に体系化されているものだが、多くの受講生にとってはそれらは日常の直接体験とは無縁で、せいぜい関連するコトバを断片的に耳にしたことがあり、また、それが使われる文脈のなかでそれを漠然とイメージしているに過ぎないものである。例年通り、受講者のサイドに立って、公教育の「教室内」で教員と児童生徒との相互作用（指導と学習）が、安定的に行われるために「教室の外」でどのような配慮・取組が行われているかという視点でその内容を再構成してみた。教科書は使用せず、毎回、独自の資料を作成し配布した。

受講を登録した学生は 97 名（学校教育教員養成課程 1 回生 66 名、特別支援教育教員養成課程 1 回生 20 名、教育学部 2 回生 6 名、3 回生 2 名、4 回生 1 名、6 回生 1 名、他学部 4 回生 1 名）であり、最終回の試験

を受けた学生は 89 名であった（そのうち 1 名には事情により別機会に追試験を実施）。授業は火曜 2 時限に本学部大講義室（収容定員 264 人）で行われた。

授業の検証のために、例年同様、毎回の授業の終わりに小紙片を配布し、その日の授業を総括させ、授業最終回には昨年と同じ質問項目・回答方法でアンケートを実施した。

2 改善の試み

昨年度の本授業に関する検証の結果、本授業内容については受講生の多くが興味関心を持ってない、自学自習が乏しいという状況が判明していたので、今年度は、①受講生の興味関心を呼び覚まし、自学自習を促すために配布資料の更なる充実と、②分かりやすい授業とするため内容のビジュアル化の推進（ビジュアルエイドの多用）に努めた。毎回の配布資料には、内容の骨子に加えて関連の新聞記事、統計情報、審議会答申、法令条文等をつとめて載せたほか、受講者の自学自習のため関連 URL を示し、本学図書館が提供している新聞記事、判例、雑誌記事索引の各データベースへのアクセスを促した。また、ビジュアル化を推進するため、授業冒頭でその日の内容をスライドで示し、その後説明に入るという手順をとってみた。

2 授業の検証

（1）アンケート

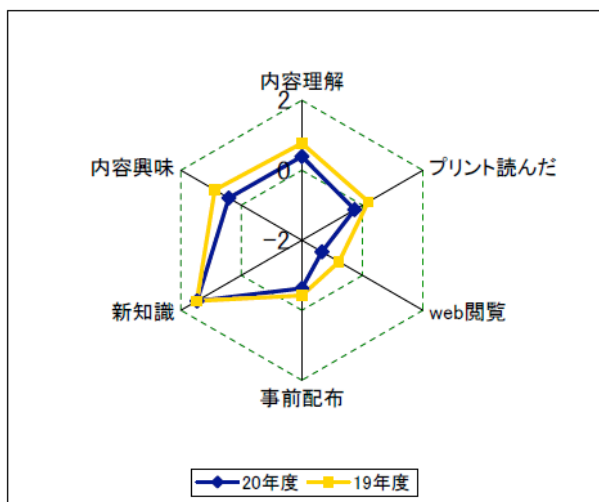
アンケートの回答の傾向は例年とほぼ同じであったが、数値は昨年を下回った。即ち、回答を見る限り、授業は改善どころか悪化したとも言える結果となった。

質問は、授業内容の理解と興味、新しい知識の取得といった、授業の成果にかかわるものと、授業外での配付資料の閲読、関連 WEB ページへのアクセスの状況、授業資料の事前配布の希望の有無等、授業外学習の状況及び意欲に関わるものである。そ

れらについて4件法（1；「強い肯定」，2；「肯定」，3；「否定」，4；「強い否定」）で回答を求めた。その回答結果を集計すると以下の通りとなる。

	1	2	3	4
内容理解できた	3	59	22	4
プリント読んだ	9	28	34	17
web閲覧した	2	3	41	42
事前配布希望	4	18	51	15
新知識得られた	48	37	2	1
内容興味もてた	12	48	18	9

これら各回答数に昨年と同様にそれぞれ2, 1, -1, -2を乗じ，その総和を回答数で除してみると，以下の図のような結果となった（紺色のライン）。これは昨年度の結果（黄色のライン）と概ね同じ傾向と言えるものの，全般に数値は若干低下しており，回答を見る限り，授業は改善どころか悪化したとも言える。



即ち，内容の理解と興味，新しい知識の取得といった，授業の成果については概して肯定的な回答が得られたが，授業外学習の状況及び意欲に関わる質問には概して否定的な回答が優勢であった。とりわけ，配布資料を授業外で読んだ（試験対策は除く）か否か，関連 web ページにアクセスしたか否か，資料の1週間前配布を希望するか否かについては否定的回答が優勢であった。

こうした傾向は例年見られるものの，今年度の授業についてとりわけ止目すべきは関連 web ページにアクセスしなかった理由として「興味がなかった」が多かったことである（全体の31%。最多は「時間的ゆとりがなかった」で，全体の44%，昨年度の「興味がなかった」は全体の18%）。アンケートにより，改善の取り組みが成果をあげていない状況が浮き彫りになった。

(2) 小紙片

例年通り，毎回の授業の終わりに小紙片を配布し，その日の授業を総括させた。その記述内容は授業の成否を探る手がかりとなりうるが，それは，教員と受講生とのコミュニケーションの場としても重要であることを改めて認識した。イラスト，授業運営への不満，ていねいな要約，率直な感想，氏名以外は何も書かれていない紙面等々……。それらをめくり読み進めていくとそこに若者の多様な「息吹」とも言うべきものを感じることができる。それは授業者の授業に対する動機づけに大いに関係する。

3 課題と工夫

単位の実質化のための取組が求められるなか，この授業は授業外学習の促進という点で課題を残していることが，アンケートから判明した。授業者は数年前からこうした傾向には気付いていたのであるが，昨年も記した通り，授業外学習の強制にはやや躊躇を覚えていた。それは，学習とは本来自発的に行われるべきものであり，教員の基本的役割は「水飲み場」に連れて行くこと，自発的に飲む水こそ美味で身体にいい，とする観念によるものである。

しかし，時勢はこうした観念からの脱却を求めているのかもしれない。宿題を課すなど，強制的に授業外学習を促す取組を，今後工夫せねばならない。児童生徒の「教室の外」を見渡す視野を培うとともに，受講学生の「教室の外」での学習を促進すること，今年もこれがこの授業の課題である。